

## 書評 Leo Suryadinata, Elections and Politics in Indonesia

著者	大形 利之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	44
号	9
ページ	67-71
発行年	2003-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007756">http://hdl.handle.net/2344/00007756</a>

Leo Suryadinata,

*Elections and Politics in  
Indonesia.*

Singapore: ISEAS, 2002, xiv + 282pp.

おお がた とし ゆき  
大形 利之

はじめに

本書の著者レオ・スルヤディナタ博士はシンガポール大学教授で、インドネシアの政治、外交、華人問題の専門家である。評者が最初にレオ氏の著作に接したのは、1989年に出版されたスハルト政権下の与党ゴルカルに関する研究書であった (*Military Ascendancy and Political Culture: A Study of Indonesia's Golkar*, Ohio University Centre for International Studies)。当時、インドネシア研究を勉強し始めたばかりの評者にとって、現地の新聞や雑誌など一次資料を駆使して事実関係を組み立てていく著者の研究スタイルは学ぶところが多かった。今回、書評を引き受けて、本書を読み始めたとき、やや大げさであるが、評者は久々に自分の目標とする師に再会できたような気がした。本書は、1955年と99年に実施されたインドネシアの総選挙結果を比較、分析することで、44年間の歳月を経たインドネシア社会に何らかの変容を見出せるかどうか、政治文化論的アプローチの手法で考察を試みた力作である。

以下、さっそく書評に取りかかってみたい。

本書の構成は以下のとおりである。

第1章 序論 エスニシティー、地域主義、宗教

第2章 パンチャシラ（建国五原則）対政治的イスラム（1955-97年）

- 第3章 スハルトの退場、ハビビの入場 1999年選挙の序曲
- 第4章 正当性と民主主義の模索
- 第5章 旧敵、曖昧なアイデンティティ
- 第6章 民主主義とエスニック・チャイニーズの政治
- 第7章 国民協議会が大統領を選出する
- 第8章 グス・ドゥルへの挑戦
- 第9章 メガの勃興
- 第10章 民主主義、インドネシア的スタイルか？

まず第1章では、インドネシアの政治と1999年総選挙を理解するうえで必要な基礎知識が紹介される。それは、種族、人種、宗教、ジャワ島と外島（ジャワ以外の島々）の間に見られる対立や問題についてである。特に重要なのは、人口の約87%をイスラム教徒が占めている同国が、イスラム教を国家宗教と定めた国ではなく、イスラム法（シャリーア）に基礎を置くイスラム国家でもないということである。著者は、選挙の動向を分析するうえで鍵を握るのが「宗教」、イスラム教であるとする（p.14）。そして第2章以下、選挙行動を読み解くキーワードとして用いられているのが、文化人類学者クリフォード・ギアツがジャワのムスリム（イスラム教徒）研究に用いた「アバンガン」（名目的なイスラム教徒）と「サントリ」（敬虔なイスラム教徒）である。

第2章では、インドネシア政治について、国家イデオロギーであるパンチャシラ（建国五原則：憲法の前文中に記載された文言で、これによってインドネシアがイスラム国家ではなく、世俗国家であることを表明している）と政治的イスラムが重要であるとし、同国で最初に実施された1955年総選挙から、権威主義的なスハルト政権下で最後に実施された97年総選挙までの政党と総選挙の歴史的解説が行われている。スハルト大統領が政権後半の1990年頃からムスリム勢力への接近を図ったことで、サントリの政治力は強まり、とりわけジャワ社会においてはアバンガンのサントリ化が進行したとする。一方でそれは、ムスリム勢力が過去の失敗に学び、イスラム

政党だけに頼ろうとする戦略を捨て、与党ゴルカル内で権力を握るという戦略が奏功した結果だとされている (pp.36-37)。

第3章では、スハルト政権崩壊直前の政治、経済、社会情勢の解説に始まり、ハビビ副大統領の大統領昇格と同政権下での政治改革、国軍の動き、ゴルカル党の分裂などが詳しく説明されている。ここで特筆しておくべきは、スハルト政権下ですべての大衆組織や政党がパンチャシラに基礎を置くことを強制されてきたが、ハビビ政権下の1998年11月に行われた法律改正によってそれが自由化され、これによってパンチャシラに代わってイスラムに基礎を置く政党の数が急増したことである。

第4章では、スハルト政権崩壊後に新しく誕生した主要な政党に関する説明と1999年総選挙実施までに起こった政治問題の解説が行われている。実際に総選挙に参加した48政党についてイデオロギー、党首、支持基盤となる地域に関する一覧表が掲載されている。章の結論として、1999年総選挙は民主的に行われたが決して公正な選挙だったとは言えず、スハルト政権下の旧勢力が選挙をリードし、金権政治がはびこったとしている (p.97)。

第5章から1999年総選挙についての本格的な分析に入る。1999年総選挙では、55年総選挙で見られた「パンチャシラ」対「政治的イスラム」という古くからの対立図式は解消されなかったが、55年総選挙とは異なり、99年総選挙に参加した政党をこの対立図式に基づいて分類することが難しくなったとしている (p.102)。少し長くなるが、本書の中で最も力のこもった章なので、著者の議論を詳しく紹介しておきたい。

まず、得票率から見た主要4政党PPP (開発統一党)、ゴルカル党、PDIP (闘争民主党)、PKB (民族覚醒党) について地域別獲得議席数が比較される。ゴルカル党とPPPは外島を中心にして、PDIPとPKBはジャワ島を中心に支持を集めたことが図表を使って示される (pp.104-105)。

次に、「世俗 (=パンチャシラに基礎を置く) 政党」対「イスラム主義 (=イスラムに基礎を置く) 政党」という視点から、1955年と99年の2つの総選

挙を比較する。1955年総選挙では世俗政党とイスラム主義政党の得票率は55.3% (24政党) 対43.5% (4政党)、99年総選挙では82.2% (30政党) 対17.8% (18政党) となっている。また1999年総選挙で、PKBやPAN (国民信託党) はパンチャシラに基礎を置くためにイスラム主義政党とは言えないが、これら2政党はインドネシアを代表するNU (ナフダトゥール・ウラマ) やムハマディアという2大イスラム社会団体の議長を務めた経験のある人物がそのトップに立っていることから、仮にこれら2政党をイスラム主義政党の中に入れて計算した場合でも、62.5% (28政党) 対37.5% (20政党) となり、やはり世俗政党の優位が確認できるとする (pp.106-107)。

インドネシアでは1990年代以降、イスラム化が進んだと言われるにもかかわらず、なぜ99年総選挙では55年総選挙よりもイスラム主義政党が得票率を減らす結果になったのか。これについて著者は、まず第1に、アバンガンもサントリも宗教対立がもたらす危険性に気づき、メガワティ率いる世俗政党のPDIPに投票したこと、第2にPKBやPAN、それにイスラム化したと言われるゴルカル党も、党のイデオロギーとしてパンチャシラを選んだこと、第3にアバンガンとサントリの差異が縮小したため、サントリでさえも一部はメガワティに投票した、第4に、1999年総選挙ではイスラム政党が数を増やし、インドネシアでは以前に比べて一層イスラム化が進行したように見えるが、実際にはイスラム過激派は少数で、現実の得票には結びつかなかったからだとしている (pp.107-109)。

では逆に1955年と99年の2つの総選挙における共通点は何か。1955年総選挙参加政党は99年総選挙ですべて消滅してしまったが、名を変えてそれらに近い政党が復活したことだと著者は述べている。かつて民族主義政党を代表したPNI (インドネシア国民党) は今日のPDIP、イスラム主義政党を代表したマシュミ党は、PAN、PBB (月星党)、PUI (イスラム信徒党)、同じく1955年総選挙ではイスラム政党として存在したNUはPKBに近い政党と見なすことができるとする。そして著者は、44年の歳月を越えて当時と今日で、その支持基盤を手がかりに

して、復活したと考えられる政党と対比させて、得票率を比較、分析する。著者はその際に生じる問題点をあらかじめ明らかにする。まず第1に1955年時にはゴルカル党はまだ存在しなかったし、PPPはスハルト政権発足後、4つのイスラム系政党が強引に融合されて生まれた政党であるが、これら今日の主要政党は分析対象から除外されること、第2に1955年当時のNUやマシュミ党はイスラム教に基礎を置く政党であったが、PKBやPANは今日、パンチャシラに基礎を置く政党に変わっていること、第3に比較する政党のそうした変化に加えて、55年時と99年時とではジャワ島の選挙区が4選挙区から5選挙区に増加、スマトラ島では3選挙区から8選挙区に増加した（スラウェシ島では変化なし）ことなどがあげられる。

この分析結果によると、ジャワ島とスラウェシ島ではPNI (= PDIP) が、1999年総選挙でほとんどすべての選挙区で得票率を大きく伸ばしてトップに立っている。唯一、東ジャワでのみ2回の総選挙ともNU (= PKB) がトップに立つ。1955年時にはスラウェシ島でマシュミ党 (= PAN, PBB, PK [公正党], PUI) が圧倒的に強かったが、99年総選挙では4州すべての選挙区で大幅に議席を失い（特に南スラウェシでは43%減）、PNI (= PDIP) に全敗している。

スマトラ島でも1955年当時は圧倒的にマシュミ党 (= PAN, PBB, PK, PUI) が強い地域であったが、99年総選挙においてはアチェを含むすべての選挙区で得票率を減らし、PNI (= PDIP) が得票率を大きく伸ばしている (pp.115-118)。

さらに同章では、1999年総選挙で議席を獲得した主要政党の国会議員らの前職を示した表が掲載され、考察が行われている。それによると、議員500人中385人(77%)が新人議員であり、ゴルカル党とPPPは再選された議員が多いこと、各党の前職については、ゴルカル党議員のうち57.4%が官僚出身者、21.7%が実業家出身者、PDIPについては47.1%が実業家出身者、9%が高い教育レベルの教員出身(学者)、PKBについては51%が宗教教師であるというのが主な特徴である。そして全議員のおよそ3分の1、

31.3%が実業家出身者であることから、彼らの発想が利己的でビジネス思考になることが予想されること、また官僚出身者が全議員の23%を占めることから、それが改革のブレーキになるのではないかと著者は見ている (pp.119-122)。

第6章では1999年総選挙における華人の政治参加についてかなり詳しく考察される。1999年総選挙に先立って週刊誌『テンボ』が実施したサーベイを紹介しながら、著者は議論を進める。その中では大きな華人コミュニティの存在する5都市（ジャカルタ、メダン、バンドン、スマラン、ポンティアナック）がサーベイの地域に選ばれた。著者が注目するのは、1999年総選挙ではPARTI（インドネシア華人改革党）という華人政党が存在するにもかかわらず、メガワティ率いるPDIPに投票するとした華人が全体の70%（1位）を占め、PARTIは24%（3位）となったことである。PDIPは華人にとって親しみを持てる民族主義政党のイメージを持つこと、PDIPが選挙で勝利すれば、華人に対して利益が大きいと見られたこと、PDIPにはクイック・キアン・ギーといったメガワティの側近を務める華人の「ポート・ゲッター」が存在したことなどが、人気の理由として考えられている。一方、PARTIがそれほど人気なかった理由として、華人が全体的に見てインドネシア国民として一体化されるようになったことと、PARTIの党首は若くて知名度が低いという問題をあげている (pp.128-129)。1999年総選挙では華人政党が3政党誕生したが、上記のPARTIは総選挙に参加せず、実業家であるヌルディン・ブルノモ党首が率いる、主に西カリマンタンや北スマトラに支持基盤を有するPBI（「多様性の中の統一」党）が国会で1議席を獲得しただけであった。

続いて著者は、華人の投票行動を1955年時と99年時について比較する。1955年総選挙にはジャワ島に支持基盤を有する華人政党Baperki（インドネシア人国籍協議会）が参加した。著者によると、全体の得票率から計算して、1955年総選挙当時、華人が全人口に占める割合を2.5%としてBaperkiへの投票率は華人有権者の14.61%、一方、99年総選挙では全人口の3%が華人であるとして、華人有権者の

11.4%がPBIに投票した。そして著者は、重要なのは投票結果ではなく、華人政党が誕生したことだと見ている（pp.137-138）。

第7章では、1999年総選挙でメガワティ率いるPDIPが最大得票を得たこと、しかし大方の予想に反して大統領選挙では国民協議会での間接選挙によってアブドゥルラフマン・ワヒドが大統領に選出されたことなど、その過程が説明されている。その中で、イスラム政党（穏健派を含む）にゴルカル党、国軍・警察代表など保守勢力が結託して、穏健なイスラム民族主義者であるワヒド支持に回り、世俗政党を代表するメガワティの大統領就任を阻止した事実は、本書の趣旨と関連して重要である。

第8章では、ワヒド政権の発足からその崩壊までが描かれる。ワヒド政権の特徴、トップ軍人の派閥と志向、ワヒド大統領が試みた国軍改革、アチェ、マルク、イリアン・ジャヤにおける分離・独立運動、ワヒドが直面した汚職疑惑など、同章はそれらの説明に充てられている。

第9章では、ワヒド大統領の汚職疑惑をめぐって生じた政府と国会の対立、ワヒド弾劾の過程、メガワティの大統領昇格、そしてハムザが副大統領に選出されるまでに行われた3回の投票結果などが解説される。政府と国会の対立はワヒドの追放で幕を閉じたが、同事件は憲法条項の見直しという重要課題を残した。

第10章（最終章）は、以上第1章～第9章を総括した結論の章とはなっておらず、政治思想や社会・宗教的性格に基づいた主要政党の分類、今日の主要政党についての党内状況の解説、国軍の政治的影響力について、また選挙制度の今後の予想など、あまり繋がりのない項目から成り立っている。ここでは著者の見解がはっきりと出ている部分をまとめておく。まず第1に、スハルト政権崩壊後、誕生した主要政党はイデオロギー的に弱く、彼らがどの階級を代表しているのかがはっきりしないこと、またいくつかの宗教政党を除き、自身のアイデンティティを確立するのにまだまだ時間が必要であろうと著者は予測している（p.206）。第2に、インドネシアにおける政党政治は、サントリの政党が力をつけている

が、サントリはアバンガンと非ムスリムから受け入れられるために寛容でなければならないと著者は言う。そして、サントリが、「イスラム国家」のイデオロギーではなく、より「イスラム化された」パンチャシラ・イデオロギーを容認しなければならないとしている（p.212）。

最後に巻末の50ページを超える付録（～）についてふれておきたい。この付録は本書の価値を高めている、評価されるべき点のひとつである。付録は、1999年総選挙における参加48政党の各州ごとの得票結果（国会）/ 国会および国民協議会全議員について生年月日、性別、宗教、教育（最終学歴）、職業、出身地、所属などを明記した表 / 1999年に組閣したワヒド内閣（第1次と第2次）、2001年8月に組閣したメガワティ内閣の閣僚名簿 / 総選挙参加48政党の党旗、からなっており、これらの情報は本書の内容に則しており、読者にとって便宜が図られたものである。

評者の言葉で著者の主張を次の一文にまとめておきたい。「インドネシアはムスリムが人口の9割近くを占める、非常にイスラム色の強い国家であるが、建国から今日に至るまで国家体制と国家運営は世俗的であり、それは今後もそれほど変わりそうにない」ということだ。著者のこうした主張に対して、評者自身、何ら反論はない。この主張を政党政治の側面から立証しようとするれば、おおよそ本書のような構成になるであろうと思われる。ただし、全く問題なしとはしない。著者の主張に対して評者はほとんど異論はないので、分析上の技術的問題点を指摘するにとどめておく。

本書の所期の目的である、1955年と99年に実施された総選挙結果を比較することで国民の投票行動からインドネシア社会に変容を見出せるかどうか、という分析が行われたのは全10章の中で第5章と第6章のみであった。

その第5章において著者は、44年の歳月を経て世俗政党のイスラム主義政党に対する優位が続いて

いることを示そうと、先述したように無理を承知のうえで当時と現在の政党を対比、比較した。しかし評者は著者が思う以上に、この試みには無理があると感じられた。理由は、著者自身が問題点としてふれている理由と同じであるが、評者には比較すること自体が無意味ではないかと思われたのである。こうした無理を承知の比較を行うよりも、44年間のイスラムをめぐる世界情勢や国際環境の変化、加えてスハルト長期政権が行った対イスラム政策など、国内外の動向の説明に第5章を充てた方が良かったの

ではないか。おそらく著者は、数値化することで自身の議論に説得力を持たせることを狙ったのだと思われるが、逆にこの分析が本書の評価を下げることになったのではないかと評者は懸念する。

一方で、第6章の1999年総選挙における華人の政治参加のケース・スタディは、華人問題を専門とする著者の着眼点と分析能力、情報提供の観点から高く評価して良いと思う。

(北海道東海大学国際文化学部助教授)